

うぐいすかま
鶯 窯跡

所在地 瀬戸市岩屋町・鳥原町地内
調査理由 東海環状自動車道建設
調査期間 平成 13 年 11 月～平成 14 年 3 月
調査面積 300 m²
担当者 服部信博・川添和暁・織部匡久



調査地点 (1/2.5 万「猿投山」)

調査の経過 本遺跡の発掘調査は東海環状自動車道建設の事前調査として国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。発掘調査は平成 10 年度から継続して行われており、平成 10 年度は斜面の灰原末端と灰原直下の平坦部までの調査を、平成 11 年度には尾根から窯体にかけての工房跡が展開する部分と 10 年度調査区の北側灰原の調査を実施した。本年度の調査面積は 300 m²で窯本体とその直下の灰原を平成 13 年 11 月から平成 14 年 3 月にかけて調査した。

立地と環境 鶯窯跡は瀬戸市岩屋町及び鳥原町に所在する 14 世紀後半から 15 世紀前半の窯業遺跡で、この時期の瀬戸窯を代表する窯である。また編年資料の標識遺跡としても知られている。本遺跡は品野盆地から水野川支流の鳥原川沿いに南東奥へ細長くのびた谷状地形の北側段丘に立地している。窯体は丘陵の南斜面、標高 227m から 231m に築造され、窯直下から標高約 200m の斜面末端まで灰原が濃密に広がっている。周辺の史跡としては遺跡東側に隣接して、境内南東の丘陵末端に遺物散布がみられる曹洞宗の洞谷山浄源寺が、また鳥原川を上流へ進むと観光地としても著名な愛知高原国定公園岩屋堂の由来にもなっている岩屋山薬師堂がある。遺跡としては縄文時代早期・前期の鳥原縄文遺跡や岩屋堂遺跡、古墳時代以降の鳥原遺跡などがある。また平成 10 年度調査区の南端平坦部分は 19 世紀の屋敷跡、浄源寺遺跡（別名源吉屋敷跡）を一部含むと考えられる。

調査の概要 今年度検出された遺構に、窯体 1 基、工房跡 4 基、土坑数基、整地部分、灰原がある。

遺 構 **窯体** 調査区北端部、丘陵の稜線より若干下部に存在している。天井の残存は見られなかったものの、煙道部から焚口まで残存しており、残存長 7 m50 cm、最大幅は焼成室で 3 m を測る。窯体検出時、燃焼部全体に硬化面がみられ、焼台の配列が確認できた。窯本来の堀形以外に壁は 2 面確認でき、最終操業時の最大幅は 1 m80 cm である。床の最大傾斜は、約 50 度と非常に急勾配である。煙道部東側には、溝 1 条が検出されている。

工房跡 今年度検出された分では、SX06・08・09・10 がある。SX06・09・10 は近接する遺構群であり、基底部の広範囲に多量の赤色化した焼土と炭化物が堆積していた。SX06 は長軸 3 m50 cm・短軸 2 m90 cm・深さ約 2 m を測る、風化花崗岩を竪穴状に掘った長方形の遺構である。検出面より深さ 1 m80 cm～1 m90 cm のレベルで黄褐色土による硬化面が見られ、さらに下層からは 3 層にわたり、炭化物・焼土・粘土を多く含む層が確認できた。繰り返し被熱している部分は、80 cm×60 cm ほどの範囲である。SX08 は、整地部分の下に存在する遺構である。深さ 80 cm を測る、風化花崗岩を竪穴状に掘った長方形の遺構で、遺構底面には、炭化物・焼土・粘土を多く含む層が確認できた。SX09

は長軸 2 m40 cm・短軸 2 m10 cm・深さ 1 m60 cmを測り、風化花崗岩を竪穴状に掘った長方形の遺構である。SX06 使用後に SX09 が作られており、SX06 側に土盛りで壁を作った状況が観察できた。遺構床面上十数 cm のレベルで黄褐色土の硬化面が一面見られ、さらに床直上には 1 m50 cm×80 cm の範囲にわたり炭化物・焼土・粘土を多く含む部分が確認できた。

灰原および整地部分 灰原は調査区南半分に濃厚に分布している。全面にわたり盗掘などによる攪乱を受けているものの、窯体前庭部より南側の広範囲にわたり、灰層と整地層とが互層堆積をなしていた。最深部で約 3 m を測る。灰層は、SY01 の前庭部から掻き出された状況が確認でき、鶯窯跡に堆積している灰原は SY01 からのみによることが伺われる。

出土遺物 古瀬戸後期を代表とする緑釉小皿・尊式花瓶・筒形容器・直縁大皿をはじめとして平碗・天目茶碗・折縁深皿・柄付片口・水注・瓶子・四耳壺・香炉などの器種が出土している。釉は濃い緑色の灰釉製品が主で、鉄釉製品も見られる。灰原下層からは無釉の片口鉢が多く出土した。集中して古瀬戸の生産に関わったものの、操業初頭には無釉の陶器も若干生産していたものと考えられる。

調査の成果 調査の成果は以下の通りである。

- (1) 窯体・工房跡・整地面・灰原などの遺構群がきわめて良好な状態で検出できただけでなく、工房跡・整地面・灰原の時期的変遷を追うことが可能になってきた。
- (2) 鶯窯跡の窯体が、最終操業時の床面傾斜が約 50 度と極めて急角度であるなど、構造上の特徴を捉えることができた。これほど急傾斜の窯体は古瀬戸窯では初例となる。
- (3) 工房跡と考えられる風化花崗岩を竪穴状に削り貫いた遺構が群集して検出されたこと。これらの遺構はほぼ共通した構造を有している。
- (4) 今年度も、遺物に関して、標識となりうる膨大な資料が出土した。今までの調査で出土しているものばかりではあるが、遺物数の把握はより実数に近いものとなるであろう。

3 年目の調査により、鶯窯跡は遺跡全体のほぼ 80% の範囲を調査したことになる。これまでの調査成果を総合的に検討することにより、古瀬戸後期の窯業生産を具体的に復元しうる資料を提示できると考えられる。さらに窯体構造・陶製茶臼や灰釉馬文皿などの特殊な遺物存在も注目される。

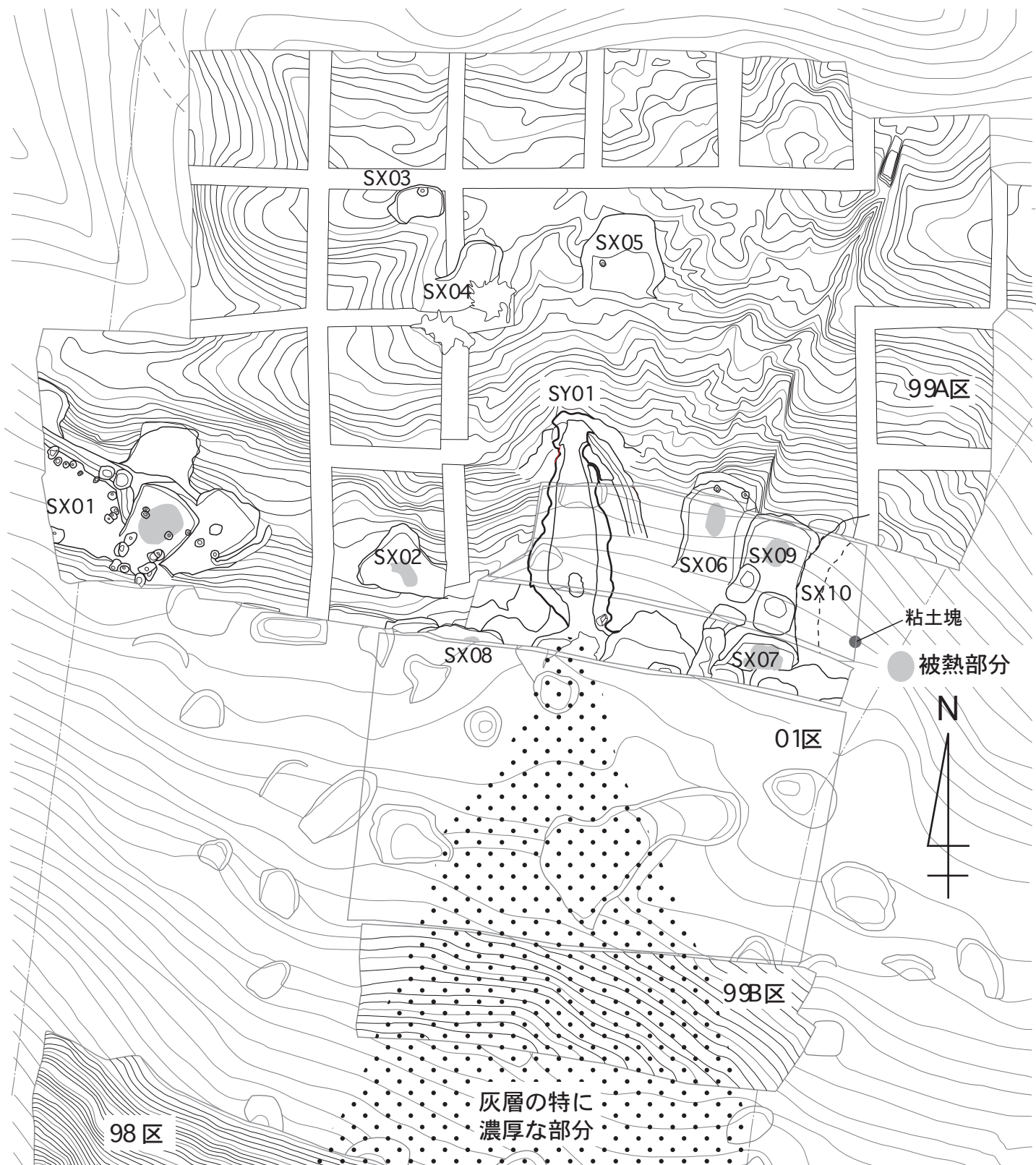
(織部匡久・川添和暁)



SY01・SX06・SX07・SX09・SX10(南東より)



調査区全景 灰原・整地面検出状況(南より)



遺構配置図 (1 : 200)